寄　　稿

計画策定にあたり心がけたこと
～策定の経緯、理念への思い、今後への期待

子ども・若者計画専門委員会は品川区青少年問題協議会の下に設置されている。コロナ禍の２年間、委員会としての活動は休止状態であったが、令和３年度の後半から準備に入り、４月以降制約のある日程の中で成案をまとめた。

第１期と異なるのは、計画改定に当たり新たに重点課題を設定し、内容を深める３つの部会を設置したことである。その上で、委員長と３部会長による課題の確認と検討結果を共有したうえで専門委員会に付すという方法をとった。

重点課題は、第１期基本方針１の中から「様々な体験活動の充実」を選び、同じく基本方針２の中から「生きづらさを持つ子ども・若者への支援」と「環境格差への対応、均等な教育機会の確保」を選択した。

これらの課題は互いに関係している。子どもの貧困は体験活動の貧困でもあり、生きづらさを抱える子ども・若者にとって生きやすい街はすべての子ども・若者にとって生きやすい街である。

基本方針３は、１、２を支えるための環境整備であり、今期の重点課題は抽出していない。しかしながら「ニーズに対する支援体制の整備」は重点課題２の中で触れており、第５章では計画の推進方策として「関係機関との連携対策」を掲げている。今後は推進体制の整備が重要な課題となっていくであろう。

計画の理念は、第１期の「子ども・若者が社会的自立を目指し」と言う前段を「すべての子ども・若者が自らの居場所を得て成長し」に改めた。後段の「人と支えあいながら、ともに生きていくまち“しながわ”」はほぼ変わっていない。内閣府が令和３年に公表した「子供・若者育成支援推進大綱」から「自立・活躍」が消え「居場所を得て、成長・活躍」に変わったことを参考にしているがいくつか注釈が必要である。

第１は「社会的自立」についてである。社会福祉法では、第３条の福祉サービスの基本理念に「有する能力に応じ自立した日常生活を営むことができるよう支援する」ことがうたわれており、障害者基本法では第１条の目的にある「障害者の自立及び社会参加の支援」をすべての施策の基本としている。国際障害者年におけるWHOの定義では「障害者の自立とは自己決定権の保障」であった。自立の中に適切な依存は含まれるのである。この考えはすべての人に共通すると考えている。そのうえで、あえて生きづらさを抱える子ども・若者に訴えやすい表現を採った。

第２に「居場所」という言葉に込めた意味である。居場所とは単に物理的な場所ではなく途中経過施設でもない。そこには人とのふれあいが必須であり、安心して自分を表現できるところを指す。イギリスでは孤独による社会的損失を4.7兆円と試算して担当大臣を置いており、我が国もそれに倣っ

ている。本来は、人生のすべてのステージにおいて必要なことである。

さらに、第３として「人と支えあいながら共に生きていける」ことは人としての成長の証しであり、そこに人格の成熟を見てよいと思われる。

第４は国の大綱にある「活躍」という言葉を外したことである。人それぞれに所を得て、支えあいながら生きていくことを理念にすればあえて活躍はいらないのである。

なお、第１期計画の積み残しの中から「当事者である子ども・若者の計画への参画」は部分的ではあるが実現できたことを喜びとしたい。計画に参加した若者やフリースペース利用者へのインタビューも掲載している。また、第２期の重点課題３部会の検討内容はできるだけ内容を盛り込む努力をした。これらの具体化も今後の課題になる。短期間ではあるが充実した議論は未来に向けた地域社会の在り方が垣間見え希望が感じられるものになった。

最後になるが、国はこの４月にこども家庭庁を発足する。それに合わせてこれまでにあった「少子化社会対策大綱」「子供・若者育成支援推進大綱」「子供の貧困対策に関する大綱」の内容を含み、子ども施策を総合的に推進するための「こども大綱」を秋ごろまでに閣議決定する方針を示した。追い風をはらみながら、品川区としての独自性を生かした展開を期待したい。

令和５年３月

専門委員会委員長　河津英彦

特集①

検討部会を通して

子ども・若者計画策定に携わった若者へのインタビュー

本計画の策定にあたっては、区内に在住・在学する大学生にも検討委員として参画いただき、実際の若者の声を反映しました。委員を務めた永田翔さんと和田桃花さんに、会議に参加してみての感想や、コロナ禍における若者の状況、若者の地域参加等についてお話いただきました。聞き手は、お二人が参画した部会の部会長の萩原建次郎先生（駒澤大学教授）です。

――お二人には、私が部会長を務めた「様々な体験活動の充実」部会に参加いただきました。これまでの学生生活の中でもあまりない経験だったかと思いますが、参加してみての率直なお気持ちを聞かせてください。

永田さん　大学の委員会活動にて学生が中心の会議に大人が混じっていることはありましたが、大人が中心の会議に参加する経験はなかったので新鮮でした。これまで、孤立は自己責任と思っていましたが、地域の人が居場所を作ろうとしていることを会議で知ることができました。

和田さん　私は公務員の仕事に興味があり、会議に参加しました。品川区は住民に様々な支援を行っていることが分かり、有意義な経験でした。また、自分が何となく思っていたことが、専門的な知識を持った方々によって具体的になり、計画に反映されたことも嬉しかったです。

――永田さんは会議の中で、小さい頃に「どんぐりおじさん」と呼ばれる地域の大人と接した経験を話されていました。

永田さん　集団下校時に付き添ってくれた方で、どんぐりのような帽子をかぶっていたため「どんぐりおじさん」と呼ばれていました。毎日一緒に帰る中で友達のように親しくなり、親の次、先生よりも身近な存在で、未だに心に残っています。

――和田さんにも、親でも先生でもない、そうした身近な大人と接した思い出はありますか？

和田さん　小さい頃、北品川児童センターで、週１回、子どもと対等に関わって遊ぶ「あそび隊」の大人は、思い出に強く残っています。

――仲良く遊ぶというだけであれば、周りの友達でも同じかと思いますが、大人であるということが、思い出に残る理由になっていそうです。

和田さん　あだ名で呼んでくれ、敬語で話す必要もない関係が、先生等他の大人と異なり、年齢の壁を超えた安心感に繋がったのだと思います。

永田さん　今はそうした大人がいなくなっている印象を受けます。親も自分の子どもが知らない大人と接するのは嫌がるのではないでしょうか。

――和田さんからも、会議の中で「今の大人や社会はそう簡単には信頼できない」というお話がありました。

和田さん　大人に対し今抱いているイメージは、小さな頃のイメージとは違っています。昔は、単に遊びを楽しみたいという理由だけで他者と繋がっていましたが、大きくなると人間関係の背景にある動機が複雑になるので、簡単に相手を信頼してはいけないと思うようになりました。

永田さん　私も和田さんと同じ考えです。年上に限らず、同い年でも信頼できないと感じることがあります。例えば、マルチ商法にはまっている学生も多いと聞いています。

――まさに、今の子ども・若者に何が起こっているのかという、この計画の根本の部分を示すお話だと思います。今後もこうした状況を踏まえて、区の施策を考えていく必要があるでしょう。

――ところで、コロナ禍により、若者の生活はどう変わりましたか？

永田さん　大学２・３年生は様々な制限等で厳しく、普通の大学生活が送れた１年生の楽しかった経験がなけれ

ば辛かったと思います。授業がオンラインになった等良かった点もありますが、オンラインでのグループワークではグループ内の限られた学生間でしか繋がりが深まらなかったように感じます。

和田さん　大学入学前は友達をたくさん作って楽しみたいと思っていましたが、入学直前にコロナ禍が始まったため、あまり人と関わることはできませんでした。今では優先順位が変わり、わざわざ時間やアルバイトで稼いだお金を費やしてまで人と遊んだり、何かに取り組みたいとはあまり思わなくなりました。

――学生時代の人との関わりは、卒業後、社会に出て地域や社会と繋がり、貢献する上での素地になると思います。こうしたことは、誰かから強制されるものではなく、自発的に行うことですが、お二人にはそうした意志はありますか？

永田さん　将来、自分の子どもの居場所を作ったり、歳を取った後の生き甲斐を作るという意味で大事だと思いますが、社会人になると週５日で仕事があり、休日は自分の好きなことをしたいので、自分から参加しようとは思いません。

和田さん　今回、小さい頃の経験が財産になると気付いたので、地域や社会と繋がる意義は理解していますが、なかなか地域活動には参加できないと思います。

――どういうきっかけがあれば地域活動に参加しますか？

永田さん　最初は、仲の良い人に誘われ、何らかの魅力的なメリットが得られると参加しやすいです。一度参加してみて楽しければ、何回も行くかもしれません。

和田さん　家族や信頼できる共通の友人が参加していて安心できる等の情報や地域の繋がりが重要となる災害対策等といった目的、参加により得られる経験・メリットが必要だと思います。また、大人になるにつれ、コミュニティが限られてくるので、青少年になってから新たに関わりを作っていくのは難しいことから、小さい頃から参加できるような仕掛けがあるとよいのではないでしょうか。

――今の若者の状況がよく分かるお話です。信頼や安心が損なわれ、繋がりが弱くなり、孤立化しやすい状況をどうしていくか、世代間の繋がりをいかに育んでいくかが今後の課題なのだと思います。最後に、お二人の意見が反映されたこの計画に期待することを教えてください。

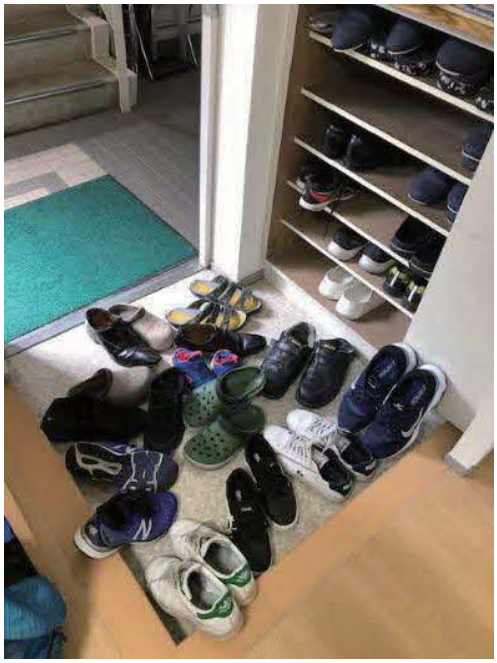
和田さん　会議に出て、年上の世代の方々が若者と関わりたいと思っていることがよく分かりました。区が若者と年上の世代の方々との間に立って意見を共有し、地域密着で計画を進めていけると良いと思います。

永田さん　計画に自分の考えが反映されたことはとても誇らしく思います。ぜひ、若者のためになるような計画になってほしいと思っています。

――こうした場に参画できたことは、大人の私でもとても嬉しいので、その気持ちはよくわかります。本日はありがとうございました。

子ども若者応援フリースペース利用者へのインタビュー

子ども若者応援フリースペース（P84参照）は、「安心できる・自信がつく・仲間がいる」をコンセプトにした、誰でも無料で利用できる子ども・若者の居場所です。学校に通えなくなったり、仕事から長期間離れていたりすると、人とのつながりが薄れていき、孤立しがちです。フリースペースでは、一人ひとりを大切にしながら、人とのつながりを保ち、次の一歩を応援する活動を進めています。
フリースペースを利用している若者たちに、どんな経過でつながり、どんな思いを持っているのかインタビューしました。
（Aさん　区内在住　男性20代）
（Bさん　元区内在住　女性20代）
聞き手は、子ども若者応援フリースペースの運営責任者である中塚 史行さんです。



――フリースペースにつながるきっかけは何だったのですか？

Aさん　父子家庭で育ちましたが、父は仕事で忙しく、一人で家にいることが多くて、気持ちも塞ぎ込みがちになり、中学の後半で不登校になりました。高校は夜間定時制に進みましたが、昼間の時間が暇だったこともあり、子ども家庭支援センターの相談員からの紹介でフリースペースを知りました。

Bさん　中学のころから私は不登校で一日中家にいて、ずっと寝ている生活をしていました。ある日、通っている塾の先生に「秘密基地があるから行ってみる？」と言われ、面白そうだし暇だから連れて行ってもらいました。それがきっかけでした。

――フリースペースの印象はどうでしたか？

Aさん　相談員の人が熱心に誘ってくれて、フリースペースには何度か行きましたが、最初はなかなかなじめず、誰とも話しができませんでした。対人恐怖もあって、スタッフが話しかけてくれても逃げ回っていました。それでも、学校の勉強を教えてもらったり、一緒にゲームをしたりして少しずつスタッフやまわりの利用者とも距離が近くなりました。そのうち毎日顔を出すようになりました。

Bさん　フリースペースには午前中から行って、お昼ご飯を買っていったり、フリースペースで作ったりしていました。災害用のアルファ化米があって、初めて食べたときすごくおいしくて感動したのを覚えています。家だとひとりぼっちですが、フリースペースではみんなとワイワイ言いながらご飯を食べることが楽しかったし、楽しみでした。

――他にはどんな思い出がありますか？

Aさん　週に１回、社会体験プログラムで田んぼ作業があって、フリースペースと連携しているNPOの人たちと郊外で農作業をするのですが、都会で生活している自分にはとても貴重な経験をしています。朝早いのが大変ですが、自然にふれることができて、気持ちもリフレッシュできます。

Bさん　私がいいなと思うことは、フリースペースは年齢もごちゃまぜで、スタッフもスタッフとは思えないところです。おしゃべりをしたり、ボードゲームをしたりしていると、だんだん盛り上がってきて、いったい誰がスタッフで、誰が利用者なのか区別がつなかくなるときがあります。そんな自由でお互いの壁がない感じが私は

好きです。

――これまでつらいことなどありましたか？

Aさん　コロナ禍でフリースペースの利用が制限されてしまったときはつらかったです。外に出ることもできず、親も帰りが遅くなることが多かったので、家でひとりぼっちの時間が多くなりました。そのときはとても苦しい気持ちになり、モヤモヤとした不安感がこみあがってきて、とても情緒不安定になりました。

　そのことをスタッフに相談したところ、一緒にどうしたら良いか考えてくれました。ひとりぼっちでさみしいとき、スタッフに連絡したら、オンラインで一緒に食事をしてくれました。たとえ画面越しでも、誰かと一緒にいるという気分になれたので、とても安心できました。

Bさん　中学生のとき、集団が苦手で、学校に行けなかったけれど、高校は少人数で、自分のやりたいことができたから３年間通えました。高校は楽しかったのだけれど、大学に入ったら、また「あれっ？」という感じになり、だんだんと遠のいてしまいました。家にも居づらくなって、夜遅くまで家に帰らず、外でブラブラすることもありました。フリースペースのスタッフには、あまり相談とかはしなかったけれど、ときどきイベントの手伝いなどに声をかけてくれて、気晴らしに行くことができました。勉強は苦手だけれど、背中を押してもらえて、今は学習支援のアルバイトをしています。

――この計画に期待することを教えてください。

Aさん　フリースペースもだんだんと利用者が多くなり、とてもにぎやかになりました。そのことは悪いことではありませんが、スタッフが忙しくなってしまったので、なかなか相談しにくくなったのが残念です。もっとスタッフを増やしてもらって、いつでもすぐに相談にのってもらえるようにしてほしいです。

　また、人数が増えたことで、部屋もせまくなって少し窮屈になってきました。引っ越ししてからは、家から少し遠くなってしまったので、家の近くに第２、第３のフリースペースがあるとうれしいです。

Bさん　コロナ禍で、みんなでワイワイとごはんを食べることができなくなったのが残念です。前のように、いっしょにご飯をつくったり、いっしょに食べたりすることができるといいなと思います。

　ずっとフリースペースにいたいけれど、だんだん大人になってきて、将来の生活が不安になります。資格とか、働く準備とか、そういうこともフリースペースで応援してもらいたいです。

　いま手話通訳士になるための勉強をしていますが、ろう者のための居場所もあったらいいなと感じています。いろいろなタイプの居場所があって、いろいろな人が交われる場が、もっと増えてほしいなと思います。

３部会の検討内容

様々な体験活動の充実 検討部会

近年、いじめ、不登校、非行問題だけではなく、長引くひきこもりや貧困問題、ヤングケアラー問題など、支援すべき課題が多様に分岐し、そちらに議論と予算、社会資源投入に力点が置かれるようになってきた。しかし、そうした多様化する課題への救済的措置などは、すべての子ども・若者を対象とする青少年育成が土台・基礎となった上に積み上げられるものではないかということが、本部会の重要な論点となった。さらに議論を進める中で、子ども・若者支援の喫緊の課題が多様化・拡散するなかで、本来土台として欠いてはならない、地域の青少年育成の土壌がやせ細り、そのことがより一層、子ども・若者の育ちの困難さを複雑化させているという認識に至った。このことは、近年の子ども・若者支援施策と従来の青少年健全育成施策との関係性を再考させ、すべての子ども・若者が健やかに育つ地域コミュニティづくりの在り方と、本計画全体の方向性を考える上でも大事な議論となった。

生きづらさをもつ子ども・若者への支援 検討部会

不登校やひきこもり等社会生活を営む上で困難を有する子ども・若者は、複雑で複合的な課題を抱えている場合が多く、相談内容は、雇用、教育、福祉など多岐にわたる。そうしたことを背景に、第１期計画では、総合相談拠点の設置や伴走支援に力を入れてきたが、近年、メンタルヘルス、自傷、自殺など、より重いケースの相談が寄せられるようになった。また、総合相談拠点においては、家庭、学校・職場につぐサードプレイスとしての役割だけではなく、ファーストプレイス化する利用者への対応も必要とされていることが、現場から報告されている。第２期計画では、従来の支援を継続しつつも、より一層、関係機関との連携強化や人材育成を図っていく必要があることが議論となった。

環境格差への対応・均等な教育機会の確保 検討部会

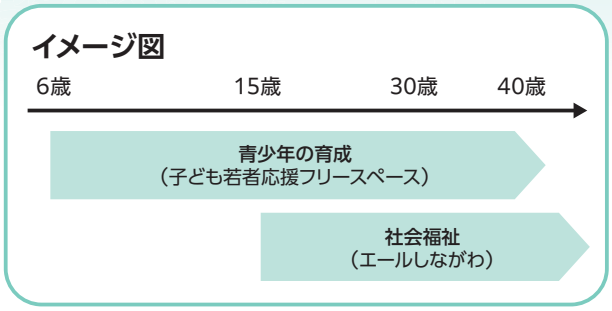
子どもの貧困や環境格差は、世帯収入や雇用のほか、世帯状況や生活環境などの、子どもを取り巻く様々な要因が複雑に絡み合って生じていることが多いため、区では平成28年度より組織横断的に「子どもの未来応援プロジェクト」を展開・実施している。本部会ではこれまでの区の事業展開をベースに、令和４年度に新たに実施した「小中学生の生活状況調査」「ひとり親家庭調査」を活用し、前回調査との比較検証や事業実績などから、今後の事業展開の方向性を議論した。議論にあたっては、「子供の貧困対策に関する大綱」にあるように、教育支援・生活支援・就労支援・経済的支援の４つの観点から考察を行った。これまで実施してきた事業を再構築し、改めて「子ども・若者計画」に体系的に位置付けることで、関連事業や関連部署とのさらなる連携を図りながら、相互補完的な事業推進や相乗効果が期待できる。

特集②

事　業　紹　介

総合的な相談拠点の整備

品川区では、平成30年に子ども・若者計画を策定して以降、社会生活を営む上で困難を有する子ども・若者を対象にした拠点整備（総合相談・居場所づくり）に力を入れてきました。



子ども若者応援フリースペース

子ども若者応援フリースペースは、「安心できる・自信がつく・仲間ができる」をモットーに、小学生から若者まで自由に過ごせる居場所として平成28年から活動を続けています。10代・20代を中心に、毎日20人ほどがフリースペースに来ていますが、ゲームをしたり、マンガを読んだり、スタッフとおしゃべりしたり、それぞれリラックスして過ごしています。

子ども向けには、お菓子づくりやプログラミング教室などのイベントも開催しており、若者向けには、農作業体験や地域イベントの手伝いなどの、「社会体験プログラム」をおこなっています。

また、不登校やひきこもりをかかえる保護者や家族が、悩みを出し合い、情報交換をする「おや親カフェ」「おしゃべり座談会」も開催しています。

家庭でもなく、学校・職場でもない、第三の居場所（サードプレイス）として、ぜひ気軽に相談・利用していただければと思います。

【場　　所】西品川1-16-2　ファミーユ西品川
【開 所 日】月曜日～金曜日　10:00～19:00
【問い合わせ】03-6421-5471

エールしながわ

エールしながわは、令和元年10月より開始しました。ひきこもりのことで悩みを抱えるご家族やご本人の社会参加に向けて、きっかけをみつけられるようサポートしています。サポート内容は、①電話や窓口での相談対応、②ひきこもり学習会・家族懇談会の開催、③社会体験の実施となっています。社会体験については、ネットワークを活かしながら、簡単な事務や軽作業、野菜の栽培など、ご本人の特性・希望に応じたオーダーメードのメニュー（20種類以上）をご用意しています。社会体験を通じ経験値を高めることで、ご本人の緊張や不安を軽減し、次のステップである社会参加をスムーズにしています。対象は、おおむね15歳～49歳までです。

まずはお気軽にご相談ください。一緒に考えていきたいと思います。

【場　　所】大井１-14-１　大井１丁目共同ビル２階
【開　所　日】①窓口対応　火曜日・木曜日　9:00～17:00
②ひきこもり学習会　奇数月 第２金曜日　18:30～20:00
家族懇談会　毎月 第３土曜日　13:30～16:00
③社会体験　月曜日～金曜日　9:00～17:00
【問い合わせ】03-5718-1273

伴走支援

子ども若者応援フリースペースやエールしながわでは、直面している問題に対して、一直線に解決を目指す支援だけでなく、広い視野を持って、共に考え活動し、支えあう援助（＝伴走支援）を行っています。

- 生きづらさをもつ子ども・若者の多くは、複雑で複合的な課題をもっています。
- 長期的な視野にたった支援が必要です。
- まずは、信頼関係をつくること、ゆるやかなつながりを持つことが大切です。
- 信頼関係を構築するためには、安心して自分らしく過ごせる居場所と、信頼できるスタッフの存在が必要です。
- ひとりで抱え込まず、不安や心配を自然に相談できる場や人間関係が必要です。

居場所×学習支援 ファミーユ西品川の取り組み

品川区では、区民住宅ファミーユ西品川（西品川１-16-２）の空き室を転用し、経済面、精神的不安や人間関係など様々な理由から生きづらさを感じている子ども・若者の居場所づくりや学習支援事業を一体的に支援できる施設を令和３年６月よりスタートしました。

これまでの子ども・若者支援は、福祉部門や子育て支援、青少年育成を担う部門が、それぞれの拠点で事業を行っていたため、利用者の橋渡しやスタッフ間の連携が課題となっていました。しかし、ひとつの建物で事業を展開することにより、担当セクションが分野を超えて取り組みやすくなり、個人の状態に合わせた支援の選択肢が広がりました。

Illustration : Yuichi Tanabe

１～２F（104号室、105号室、205号室）

子ども・若者の居場所

子ども若者応援フリースペース

フリースペースでは、専門性を持つスタッフが常駐し、グループ活動や個別相談を行っています。（P84参照）

３F（304号室、305号室）

子ども・若者の学習支援

ぐんぐんスクール

ひとり親家庭の経済的・精神的不安の軽減や自立支援に向けた取り組みとして、小学校５年生～高校生を対象とした個別の学習指導や進路相談を行います。

あした塾

生活困窮世帯の中学生を対象とした少人数学習指導を行い、基礎学力の向上、希望校への進学を目指します。

ドリームサポート

生活困窮世帯の中高生や20歳未満の高校中退者などの自学自習の場、学習に関する相談を受け付けます。

コロナ禍における地域の取り組み

「荏原第五お家で地域くえすと☆」（令和２年度実施）

令和２年９月26日（土）、品川区の地区委員会事業では初の試みである、オンライン事業「荏原第五お家で地域くえすと☆」を開催しました。この事業は、新型コロナウイルス感染症の影響によって多くの地域イベントが中止になる中、直接集まらなくても子どもたちに楽しんでもらう事が何かできないかと思い企画したものです。

参加者は「勇者」の役目を担い、ゲーム上の荏原第五地区「エバーランド」を舞台に、その地区の平和を取り戻すため10の町会を巡りながらクイズ等に挑戦しました。ゲームの中で出題されたクイズは地域に関わるもので、戸越小学校や豊葉の杜学園の生徒が作成しています。

当日は、戸越小学校や豊葉の杜学園の１～４年生等の親子約40組が、それぞれの自宅からオンラインで参加しました。また、地域センターでゲームの進行状況を確認していた地区委員の皆さんもゲームに挑戦し、苦戦しながらもクイズに回答するなど楽しんでいました。

事業後のアンケートでは、「家族でワイワイ楽しめた。」「地域のことを知ることができてよかった。」「また参加したい！」などの感想があり、多くの方に喜んでもらうことができました。

コロナ禍で子どもたちが地域にかかわる機会が減ってしまっている中で、家に居ながらも親子で一緒にクイズを楽しみながら、地域のことを知るきっかけとなる取り組みになりました。今回のゲームをきっかけに、実際にクイズに出てきたスポットへ訪れていただけると嬉しいです。

（青少年対策荏原第五地区委員会）

品川コミュニティ・スクール～地域とともにある学校づくり～

品川コミュニティ・スクールとは・・

品川区では、地域とともにある学校づくりを目指し、平成28年度から平成30年度にかけて全小学校・中学校・義務教育学校を品川コミュニティ・スクールとして指定しました。

品川コミュニティ・スクールとは、学校と地域が連携して、子どもたちを育てていく仕組みのことで、保護者、地域住民、学識経験者等が学校運営に参画することで、学校と地域住民が一体となって、継続性を保ちながら、教育活動の改善や児童・生徒の健全育成に取り組みます。また、地域全体で学校教育を支援することで、学校の教育活動の充実を目指すとともに、地域の人材の有効活用や地域の教育力の活性化を図ります。

この取組により、学校が元気に、地域が元気になることを目指しています。

未来を切り拓く力の育成をめざして

～地域とともにある学校づくり～

学校運営に参画する　校区教育協働委員会

保護者、地域住民、卒業生など様々な人たちが委員となり、どのような子どもを育てていくのか、何を実現していくのかという目標・ビジョンを共有。「学校運営の基本方針の承認」「教育活動の評価」「区費教職員等の活用への意見」「学校支援活動の企画・調整」の４つの役割を有します。

地域と学校をつなぐ　**学校地域コーディネーター**

学校支援を行う　学校支援地域本部

学習支援活動	【品川地域未来塾】 各校、様々なスタイルで、授業時間外に「学びの場」を提供しています。	
授業支援活動	「家庭科」「町たんけん」「職場体験」「市民科」など、授業の質の向上を目指して様々な支援しています。	
環境整備支援活動	学校花壇や畑、蔵書整理、校内掲示など、得意なことを生かして、地域の方々が活躍しています。	
その他	あいさつ運動、朝運動、お祭り、学校行事補助、部活動支援、ボランティア活動など多様な取り組みが行われています。	

教育総合支援センターの取り組み

教育総合支援センターでは、不登校やいじめなど学校や教育に関するお悩みについて、下記の３つの機関で相談や支援を行っています。

教育相談室

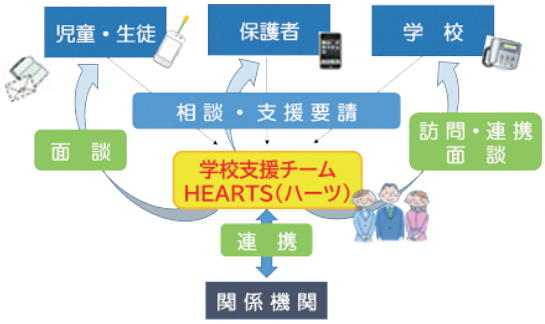
品川区在住のお子さんの悩みや心配について、本人と保護者のご相談にお応えします。

- カウンセラー（心理）と教育専門の相談員で対応しています。
- 電話相談と来室相談（要予約）が可能です。
- 来室相談については、カウンセリングまたはプレイセラピーを行います。

学校支援チームHEARTS(ハーツ)

不登校やいじめ等のお困り事に対して、区立学校在籍のお子さん、学校、家庭と共に解決に向けてサポートします。

- ソーシャルワーカー、カウンセラー、元警察官、指導主事、教育アドバイザーで対応しています。
- 来室相談、家庭訪問や学校訪問等のアウトリーチ支援（要予約）を行います。



マイスクール(八潮・五反田・浜川)

不登校およびその傾向にある区立学校在籍の子どもたちに対して、社会的自立ができるようにしていくための支援を行っています。

マイスクール八潮

対象学年 ▶ ３～９年生

教科学習、校外体育学習や菜園活動等の体験活動、子ども同士や指導員、地域等とかかわる交流活動を行っています。

マイスクール五反田・浜川

対象学年　五反田 ▶ ５～９年生
浜　川 ▶ ７～９年生

個別学習を中心とした活動を行っています。